

第2章 東日本大震災における宮古市田老地区の津波対策の効果に関する実態

1. はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、岩手県・宮城県・福島県の沿岸市町村を中心に、死者・行方不明者19,312人（平成23年12月27日現在）という戦後最大の被害をもたらした。また、従来から各所で防潮堤が整備されていたが、今回の震災では多くの防潮堤が壊滅的な被害を被った。特に、「万里の長城」と呼ばれていた岩手県宮古市田老地区（旧田老町、平成17年に宮古市に合併）の防潮堤も同様に壊滅的な被害を受け、田老地区だけで死者・行方不明者185人（平成23年8月3日現在）が犠牲になった。

この田老地区は、過去にも幾度となく被害を被ってきた。明治29年（1896年）6月15日の明治三陸地震では約15mの津波が押し寄せ、1,859人の死者・行方不明者が、昭和8年（1933年）3月3日の昭和三陸地震では約10mの津波が押し寄せ、911人の死者・行方不明者が発生した（当時の人口と被害数、並びに今回の震災での被害数については、表2-1のとおり）。

2つの大きな津波災害を経験して、旧田老町では昭和8年より様々な津波対策に力を入れてきた。その代表的なものが「防潮堤」であったが、今回の震災においては、この「防潮堤」がクローズアップされ、以下のような報道が多くなされた。

『「日本一の防潮堤」無残 想定外の大津波、住民ぼうぜん』（『朝日新聞』平成23年3月20日）
 ……（略）……〇〇さんは「防潮堤は安心のよりどころだった。『防潮堤があるから』と逃げ遅れた人も多かったのではないかと。堤をもっと高くしないと、これでは暮らしていけない」……（略）……
 『津波、10メートルの防潮堤越える……岩手県宮古・田老地区』（『産経新聞』平成23年3月16日）
 ……（略）……〇〇さんは「防潮堤を造ったからと、油断して逃げなかった人もいた。過去の教訓を、今回の津波は超えてしまった」と悔やんだ。……（略）……

しかし、田老地区では防潮堤以外にも市街地整備や防災啓発など様々な対策を施していたが、今回の報道ではこれらの内容について耳にすることはほとんどなかった。

そこで、本報告では、田老地区でこれまで進めてきた津波対策を紹介し、それらの対策が今回の震災でどのように実を結んだのかを報告する。なお、今回の報告は、田老地区の津波対策に長年携わってきた宮古市危機管理課の担当者にヒアリングを行ったものをまとめたものである。

表 2-1 明治三陸地震・昭和三陸地震・東日本大震災における田老地区の人口及び被害数

	発生年月日	人口	死者・行方不明者数	死者・行方不明者数／人口
明治三陸地震	明治29年(1896年)6月15日	3,745人	1,859人	0.50
昭和三陸地震	昭和8年(1933年)3月3日	5,120人	911人	0.18
東日本大震災	平成23年(2011年)3月11日	4,434人	185人	0.04

(注) 人口については、明治三陸地震は明治22年現在、昭和三陸地震は昭和7年現在（当時の残っている記録で一番近い数字）。東日本大震災は、平成23年3月1日現在。



写真 2-1 田老地区防潮堤の被害（震災から約 1 ヶ月後）



写真 2-2 田老地区市街地の被害（震災から約 1 ヶ月後）

2. 田老地区における従前からの津波対策

(1) 防災教育・啓発

田老地区では、(旧田老町時代から)そもそも防潮堤は津波を完璧に防ぐものでなく、避難の時間を稼ぐものとして位置づけられ、様々な啓発を行ってきた。特に、平成 16 年に完成した津波シミュレーション(図 2-1 参照)では、明治三陸地震等を想定した津波が防潮堤を乗り越えてくる映像を再現し、住民説明会等で公表された。さらに、この津波シミュレーションを活用して、自治会などを対象にした町歩きやワークショップを行い、住民を中心としたハザードマップづくりを行ってきた(図 2-2 参照)。